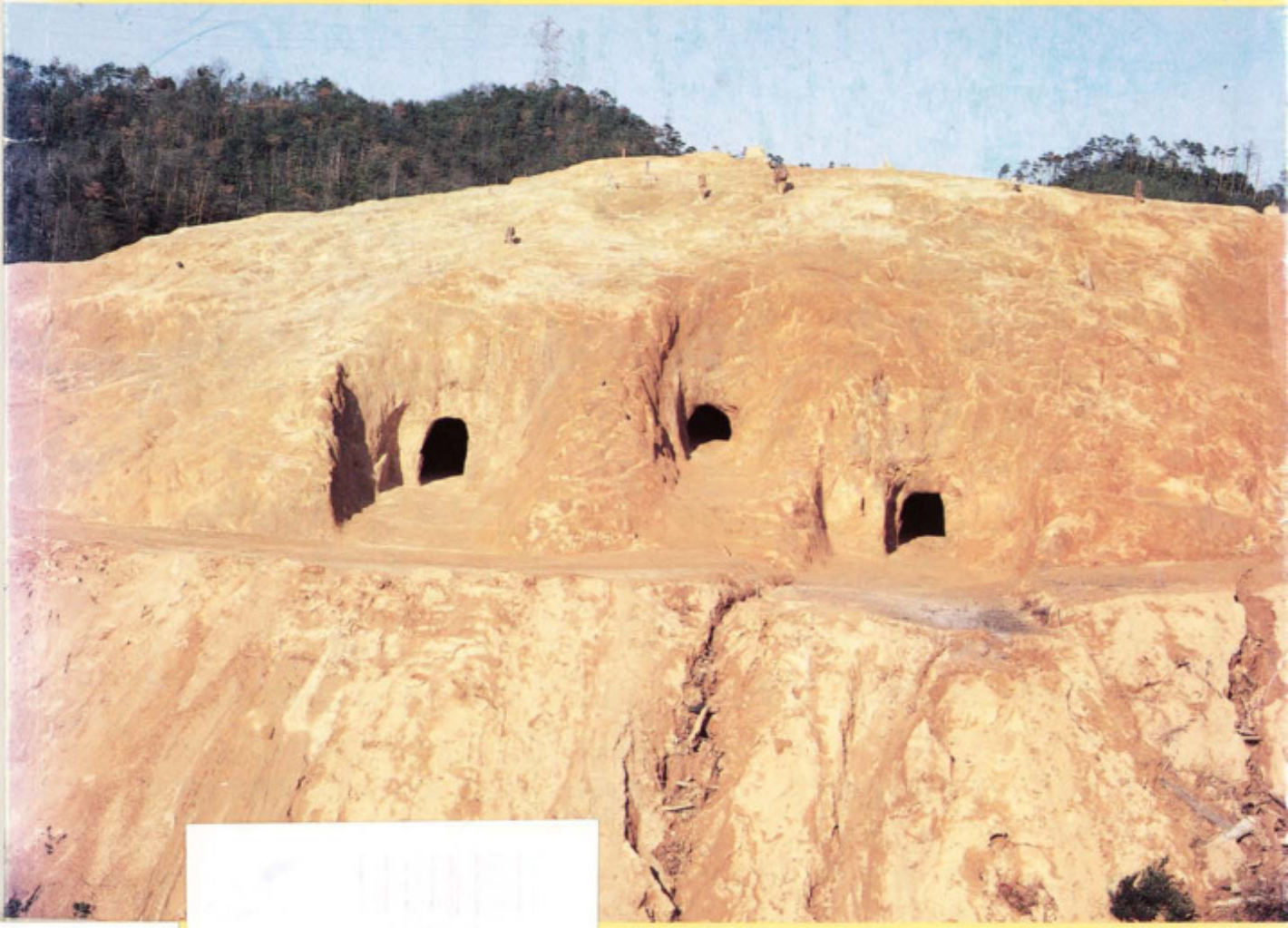
国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査概報

（臼コクリ遺跡、岩屋口遺跡、越峠遺跡）



２年３月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道９号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成３年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成４年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長　神長耕二

島根県教育委員会では、平成元年度から建設省中国地方建設局の委託を受けて、この調査を実施しています。本年度は臼コクリ遺跡など３遺跡を調査しましたが、弥生時代～奈良時代の建物跡や土壙墓、古墳時代の円墳、横穴墓など貴重な遺構の存在が明らかになりました。

本書は、平成３年度の調査概報ですが、多少なりとも皆様の文化財に対する理解と関心を高めることに役立ちましたら幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力頂きました関係各位に対し厚く御礼を申し上げます。

平成４年３月

島根県教育委員会

教育長　坂本和男

例　　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成3年度に実施した一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概報です。後日、平成4年度調査の結果と合わせて、本報告を作成する予定です。

2．本年度は臼コクリ遺跡(安来市佐久保町字臼コクリ766－4外)、岩屋口遺跡（安来市佐久保町字カワラケ免517外)、越峠遺跡(安来市黒井田町字高垣1714－23外）の3遺跡を調査しました。

3．調査組織

事務局　目次理雄（文化課長)、藤原義光（同課長補佐)、勝部　昭（同）
高橋　研（文化係長)、伊藤　宏（文化係主事)、加田恵康（島根県教育文化財団嘱託)

調査員　卜部吉博（文化課埋蔵文化財第二係長)、今岡一三（同主事)、
宮本正保(同)、大庭俊次(同)、寺尾　令(教諭兼文化財保護主事)、
石原　順（同)、井上正志（教諭兼主事)、山尾一郎（同）
佐々木　聡（同)、土谷　徹（同)、倉敷　実（同）

調査指導者　山本　清（島根県文化財保護審議会委員)、池田満雄（同)、
渡部貞幸（島根大学法文学部教授)、井上貴央（鳥取大学医学部教授)、三浦　清（島根大学教育学部教授)、田中義昭（島根大学法文学部教授）

4．本書で使用した遺構略記号は次のとおりです。
ＳＩ－竪穴住居跡　ＳＢ－掘立柱建物跡　ＳＫ－土壙　Ｐ－ピット
ＳＤ－溝状の遺構　ＳＸ－その他の遺構

5．本書に掲載した「調査した遺跡とその周辺の遺跡」では、建設省国土地理院発行の25000分の1の地図を使用しています。

6．本書の執筆、編集は調査員が討議してこれを行いました。

7．本遺跡出土遺物及び写真は島根県教育委員会で保管しています。

調査に至る経緯、経過

今年度の調査は、一般国道９号安来道路の建設工事に伴い、1989年に開始した調査の３年目にあたり、昨年の範囲確認調査の結果をもとにして臼コクリ遺跡、岩屋口遺跡、越峠遺跡の全面調査を実施しました。

臼コクリ遺跡は、東西方向に延びる２本の丘陵部からなり、ここに調査区を５ヵ所（A－E区）設定して、４月26日から順次調査を開始しました。A、B区からは土壙、ピットなどの遺構や古式土師器などの遺物をいくつか検出しましたが、C区では遺構、遺物とも検出できませんでした。D区では、円墳１基、掘立柱建物跡５棟を、またE区では古墳時代後期の横穴墓15基、弥生時代後期の土壙墓19基、古墳時代前期の土器棺墓４基、弥生時代終末期の竪穴住居跡６棟、同時期の掘立柱建物跡３棟など非常に多くの遺構や遺物を検出し、12月20日に調査を終了しました。

岩屋口遺跡は、水田部分(Ⅲ区)と水田を挟んだ東西の２本の丘陵からなり、本年度は、東側丘陵（Ⅰ区）の西側斜面、西側丘陵（Ⅱ区）の南側斜面の調査を行いました。４月26日からⅡ区の調査を始め、掘立柱建物跡10棟、竪穴住居跡１棟、その他多数のピットを検出しました。いずれも時期は不明です。遺物はほとんど出土しませんでしたが、柱穴内から鉄鎌片が出土しています。続いて７月２日からⅠ区の調査を始め、古墳時代中期の竪穴住居跡12棟・掘立柱建物跡17棟（一部古墳時代後期）・古墳時代後期の横穴墓１基・時期不明の土壙３基・焼土土壙１基を検出しました。また、多くの遺物も検出し12月24日に調査を終了しました。

越峠遺跡は、北東から南西に延びる丘陵部と、その東側100mにある２つの丘陵に挟まれた谷奥の緩斜面に存在しており、西側の丘陵をA区、東側の谷部分をB区として調査を実施しました。B区は、７月15日に調査を開始し、弥生時代中期～古墳時代初頭の竪穴住居跡３棟、掘立柱建物跡２棟など多くの遺構、遺物を検出しました。ひきつづきA区の調査に入り、西側斜面では、尾根から流れ込んだと考えられる遺物を確認したのみで、遺構は見つかりませんでしたが、尾根上では弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居跡３棟、東側の斜面で古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡群を検出して、12月20日に現地での調査を終了しました。

位　置　と　環　境

安来市は島根県の東端部に位置し、飯梨、伯太、吉田の三河川によって形成された安来平野は、北に中海を望み、東部から南西部にかけては丘陵地になっています。今回調査した３遺跡は、伯太川下流の東側、安来市街地の南側に広がる丘陵地に位置しています。

安来市では縄文時代（約10,000年前～2,300年前）以前の遺跡はあまり知られていませんが、弥生時代（約2,300年前～1,700年前）のものとしては谷に面した丘陵地帯から竪穴住居跡や掘立柱建物跡が、また、丘陵の尾根上からは土壙墓や、古墳に先駆ける、墳丘を伴う大きな墓―四隅突出型墳丘墓なども発見されています。

古墳時代（約1,700年前～1,300年前）には同様の立地に竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見られるほか、多くの古墳の存在が明らかになっています。また、安来地方では古墳時代後期盛んに横穴墓が造られており、出雲地方の中で最も集中する地域のひとつです。さらに、須恵器の窯跡や玉作の工房跡などの生産遺跡もあり、古代人の日常生活、政治、経済、精神生活に至るまで、我々現代人にさまざまな考察の手がかりを与えてくれています。

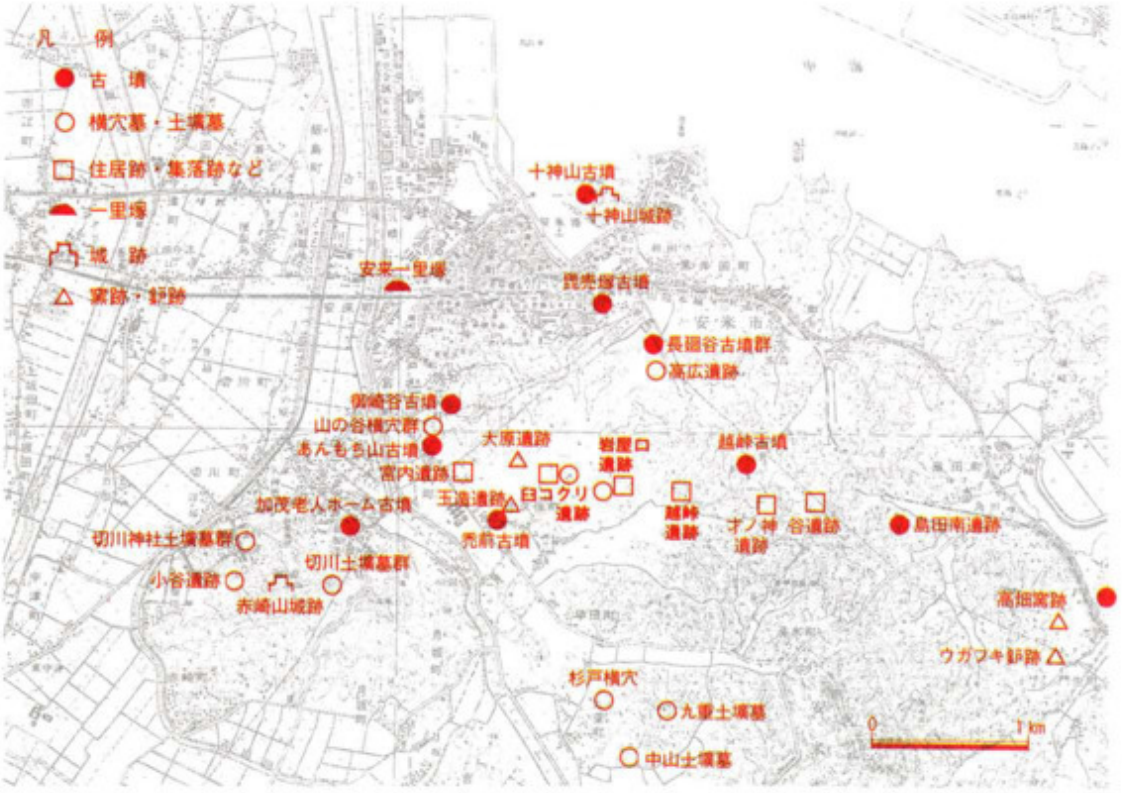


図１　調査した遺跡とその周辺の遺跡

臼　コ　ク　リ　遺　跡

D　　区

D区では古墳１基、掘立柱建物跡５棟を検出しました。古墳はD区の尾根上に位置する径約10m、高さ45cmの小型の円墳で、墳丘の半分近くが削平されていたため、幅約１mの周溝を検出しただけでした。この周溝からは５世紀後半頃の須恵器（有蓋高坏の蓋）２個と円筒埴輪の破片が出土しています。掘立柱建物跡は古墳の南側斜面(20m下方)にあり、それぞれ床面の大半が流出していました。古墳時代後期の須恵器の蓋坏と甕片、同時期の土師器の甕、手づくねの壺、土製支脚などが出土しました。また鉄滓が多数出土しましたが、鈩などの遺構は検出できませんでした。

写真１　D区円墳（西から）

E　　区

E区では尾根上から斜面にかけて弥生時代終末頃の竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡３棟、土壙墓群、古墳時代前期の土器棺墓４基を、斜面から古墳時代後期の横穴墓15基をそれぞれ検出しました。

横　穴　墓

E区の西に延びる尾根上には主体部（墳墓全体の内で遺骸を直接埋葬した部分）を持たない２つの墳丘があり、これらの南北の斜面に北側９基、南側６基の横穴墓を検出しました。横穴墓は墓前域(前庭、墓道)、羨道、玄室、またこれらを隔てる閉塞施設からなり、玄室の形はドーム形、かまぼこ形、家形、擬似四注式（テント形）などさまざまです。臼コクリ遺跡で検出した15基の横穴墓にはドーム形４基、擬似四注式10基と未完成のものが１基ありました。

写真２　N－２号横穴墓正面（北から）

N－２号横穴墓（写真２）

規模は前庭部の先端から玄室の奥壁ま

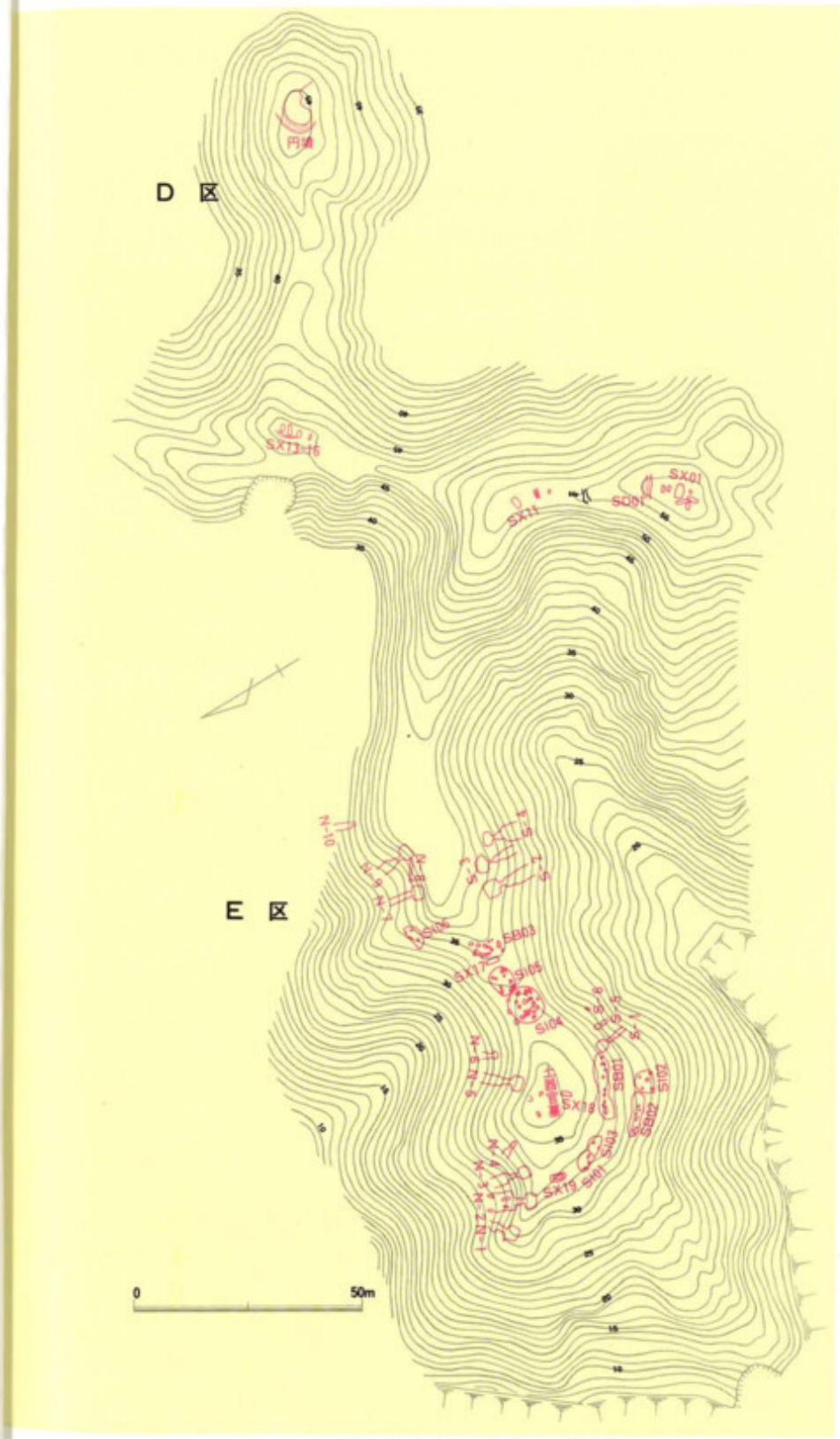


図2　臼コクリ遺跡遺構位置図

で9.6m、前庭部の幅は4.5mでかなり広く造られています。玄室は奥行2.8m、幅3m、高さ2.5mで四方の壁と天井との間に境界線のない擬似四注式と呼ばれる形をしています。

玄室床面の⅔に須恵器の大甕を破砕して敷き詰めた屍床（写真3）が遺存していました。須恵器片の大きさや表裏はまちまちでした。屍床の上やその周辺から完形の須恵器や大刀、玉類、金環、耳環などが出土し、人骨も検出しました。

また、前庭部には土壙が4ヵ所掘り込まれており、そのうち、左上の土壙（写真2）から西側に50cm離れたところで馬具（辻金具）が1個出土しています。

玄室内の須恵器の時期には明らかな違

いが見られ、追葬が行われたことがうかがえます。前庭部の土壙内からも古墳時代後期の須恵器が出土しています。

写真３　Ｎ－２号横穴墓土器屍床

写真４　Ｓ－２号横穴墓玄室の石棺

写真５　Ｓ－２号横穴墓玄室内
出土環頭大刀の柄頭

Ｓ－２号横穴墓

全長11m、前庭部の幅は３mで、玄室は奥行3.3m、幅3.8m、高さ2.3mで、今回検出した横穴墓の玄室の中では最大で、その形状は擬似四注式でした。玄室の西側（左側）に、横口式の組合せ家形石棺を設置しており、棺の規模は、長さ2.3m、幅1.2m、高さ80cmと大きく、丁寧な造りでした(写真４)。蓋石は１枚の板石でつくられていたものの、落盤のため中央で割れていました。全長2.4m、幅1.1m、高さ30cmで屋根形を呈し、３面に立方形の縄掛突起が付いていました。棺の中には少量の須恵器と人骨が残存していただけですが、横口前の石材上から金銅製単竜環頭大刀の柄頭（写真５）が出土しました。環頭大刀の刀身はなく、柄部の一部のみで遺存状態は不良でした。環の長径6.5cm、短径4.4cmを測り、楕円形の環体の内側に一頭の竜の頭部を側面から表現しています。

玄室には石棺が置かれている反対側の床面に長頸壺、短頸壺、瑞、台付瑞、蓋坏、高坏、提瓶、壺のミニチュアなど多種多量の須恵器が置かれていました。これらにも時期差があり追葬の行われたことがうかがえます。

このほかに、石棺が納められている横穴墓はＳ－３号横穴墓で、ここにはＳ－２号より小さ

い横口式の組合せ家形石棺が２組、玄室の左右に納められていました。

石棺、大刀、環頭大刀の柄頭、金環、耳環、馬具、玉類など今回検出した横穴墓の中には、横穴式石室の副葬品と比べて勝るとも劣らない、豪華な副葬品が供えられているものがありました。これらの横穴墓や出土遺物を検討することによって被葬者の地位や、横穴墓のあり方の変化、当時の他地域との交流などがより一層明らかになると思われます。

住　居　跡

先に述べたようにＥ区では竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡３棟を検出しました。これらの遺構の床面からは、例外なく弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての弥生土器・古式土師器が多量に出土していて、他の土器は見られず、短期間に営まれたことをうかがわせます。

竪穴住居跡

〔ＳＩ－０４〕　南北７ｍ、東西８ｍでほぼ円形の非常に大きなもので、多数のピットと幅10～15cmの周溝を検出し、古式土師器などとともに鉄器、石器などが出土しました。また、このＳＩ－０４では規模を縮小して建て替えが行われており、建て替え後の規模は径約６ｍです。

なおＳＩ－０４の北側に３基並んだ焼土土壙（いずれも径約１ｍ）を検出しましたが、これはＳＩ－０４の外周を削って後に造られたものと思われます。ＳＩ－０４との関係は不明です。

〔ＳＩ－０５〕　ＳＩ－０４の東側に隣接してＳＩ－０５を検出しました。ＳＩ－０４よりも50cm高いところに造られています。これもまたＳＩ－０４と同じく縮小して建て替えが行われており、外側は縦横６ｍの隅丸方形、内側の規模は不明です。幅10～15cmの周溝(外側のみ)、多数のピット、地山が赤茶け焼土と化している部分を５ヵ所それぞれ検出しました。

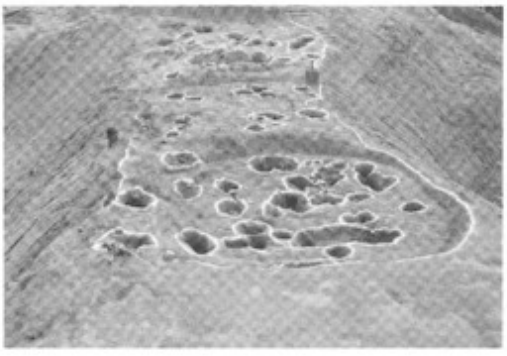


写真６　Ｅ区竪穴住居跡ＳＩ－０４・０５

いずれの遺構も建て替えの影響からかピットが錯綜しており、建物の規模を推し量ることは困難でした。

これら２つの竪穴住居跡は尾根上の鞍部の狭い平坦面をいっぱいに使って造られ、規模も他の建物跡と比べると異様に

大きく、何か特殊な用途の建物跡だった可能性も考えられます。

土　壙　墓

E区では５ヵ所で19基の土壙墓を検出しました。

〔ＳＸ－０１〕　ＳＸ－０１～０６までの６基の土壙墓は尾根上にあった１基の墳丘から検出しました。この墳丘は長径11m、短径７mの楕円形です。墳丘のほぼ中心直下に２段に掘り込まれたＳＸ－０１を検出しました。外側の掘り方は長さ３m、幅1.6m、内側は長さ2.1m、幅は長辺90cm、短辺60cm、深さは中段まで30cm、底まで40cmの計70cmをそれぞれ測り、今回検出した土壙墓の中ではＳＸ－１９、ＳＸ－１７に次ぐ規模でした。

写真７　Ｅ区土壙墓群（北から）

このほかに、２段に掘り込んである土壙墓はＳＸ－０３、１０、１１、１９など比較的大きいものでした。

ＳＸ－０１の内部や周辺、またＳＸ－０１～０６までの６基の墓壙と、同じ尾根上にある他の墓壙とを区切っている溝ＳＤ－０１などから、弥生時代後期の土器が出土しました。

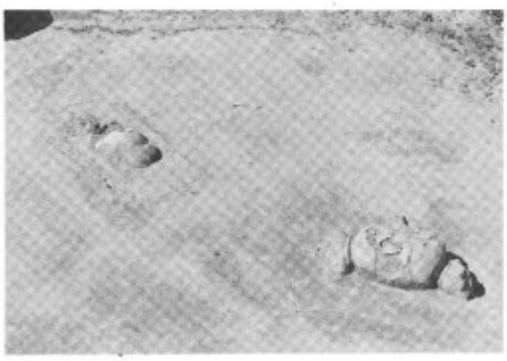


写真８　Ｅ区土器棺墓２号（右）、３号（左）

このほか、土壙墓群とその周辺からの特筆すべき遺物としては、ＳＸ－０９付近の西側斜面で出土した小型特殊器台脚部の破片と、ＳＸ－１７から出土した鉄器片などがあります。

島根県内で小型特殊器台が出土したのはほんの数例です。

土器棺墓

ふだん飲食物を貯蔵するのに使用したと思われる土器を、埋葬に使用したものが土器棺ですが、今回、Ｅ区の２ヵ所で検出した４基の土器棺墓は、すべて土師器であり、口縁部その他の特徴から古墳時代前期のものと思われます。

写真のように１個から数個体の土器を使って遺骸を納める柩や、遺骸の覆いを作っているようです。

岩　屋　口　遺　跡

岩屋口遺跡は、安来市佐久保町にあり、伯太川東側で南西に延びる低丘陵地及び谷間に位置しています。調査範囲が３カ所に分かれているため、２つの丘陵を西側よりＩ区・II区とし、その間の水田をIII区としました。本年度調査を行ったＩ区・II区から検出した主な遺構についての概要は次の通りです。

(1)　Ｉ　　区

ＳＩ－０１～０３

西側斜面谷間の底部で検出した建物跡で、写真９のように３棟が互いに切りあっています。いずれも古墳時代中期の方形住居と考えられます。東側半分はすでに流出しており、床面は最長部で７ｍ×３ｍの大きさです。壁は北から南にかけて削られていますが、現状の高さは北側40～60cmです。壁際に幅10～30cmの溝が廻り、床面には２条の浅い溝（幅10cm・長さ3.5m、幅20～30cm・長さ４ｍ）が南北に掘られています。床面で７つのピットを検出しました。そのうち、２穴は直径70～80cmと大きく、他は直径20cm程度でした。床面中央には焼土面があり、土師器坏・高坏・壺や甕口縁部、須恵器壺の破片が数点出土しています。

ＳＩ－０２は、北壁部分で床面幅１ｍ、長さ６ｍが残存しているだけの建物跡です。壁は流出著しく最高部で50cmの高さです。壁下に幅10cm、長さ２ｍの溝が廻っています。古墳時代中期と思われる土器が出土しています。

ＳＩ－０３は、床面の大きさ約6.4m×5.4mの建物跡です。壁際に幅20～30cm、深さ15～20cmの溝が廻り、床面には幅20～10cm、長さ1.8mの溝が南西に掘られています。北東部分の壁が残っており、最高部で70cmの高さです。４つの主柱穴は直径40～50cm、深さ60～70cm、柱穴間隔は2.5m×３ｍです。その他、床面に直径20～30cmのピットを６穴、北の周溝内では直径20cm、深さ10cmのピットを４穴検出しました。中央ピットは直径30cmで、周囲に焼土が確認できました。遺物は古墳時代中期の土

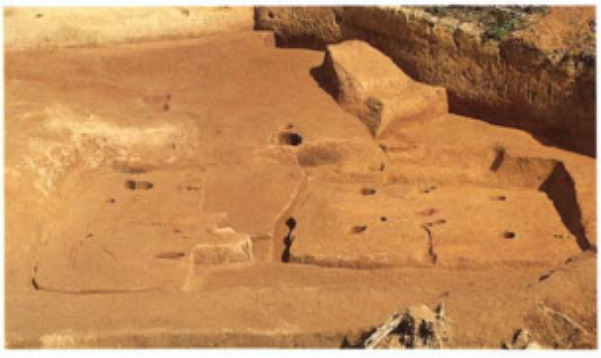


写真９　Ｉ区　ＳＩ－０１～０３（南から）

師器壺の口縁部・須恵器の蓋坏・壺・高坏が出土しています。

ＳＢ－０１

Ｉ区最西端（標高20.5m）に位置し、現状で長さ7.5m、幅80～100cmの大きさの平坦面につくられています。南北方向に延びる柱穴6穴を検出し、５間以上の比較的大型の掘立柱建物跡だと推定されます。柱穴の直径30～50cm、柱間距離は140～150cmです。遺物は、古墳時代後期と考えられる須恵器や石製紡錘車・子持勾玉が出土しています。

写真10　Ｉ区　ＳＢ－０１（南から）

ＳＢ－０４

横穴墓の南下（標高23～24m）に位置しています。現状で幅２～４m、北側の壁高2.0～2.3mの東西方向に延びる平坦面で、４棟の建物跡（西側よりＳＢ－０４ａ～ｄ）を検出しました。遺物は、須恵器蓋坏・甕片が出土しています。

ＳＢ－０４ａは、東西２間・南１間以上の建物跡と推定されます。柱穴の直径30～80cmと大きさにばらつきがあり、柱間距離は1.5～1.6m、梁間は東側で２mです。東端の柱穴には複数の柱痕が認められます。ＳＢ－０４ｂは、ＳＢ－０４ａとほぼ並行しており、３間×１間以上の建物跡と推定されます。桁行4.4m、柱穴の直径約40cm、柱間距離1.4m、梁間は西側で1.5mです。ＳＢ－０４ｃ・ｄは、ＳＢ－０４ｂの東に位置し、２棟並行しています。いずれも南側は流出しており、この辺りでは平坦面は幅約1.2mしか残っていません。ＳＢ－０４ｃは、４間×１間以上の建物跡と推定され、桁行約６mです。柱穴の直径約30～40cm、梁間は約1.5m、柱間距離は1.4～1.6mとやや不均等です。柱穴が他の建物跡と重複しているため、同じ位置で少なくとも２度以上の建て替えをしたと考えられます。ＳＢ－０４ｄは、３間×１間以上の

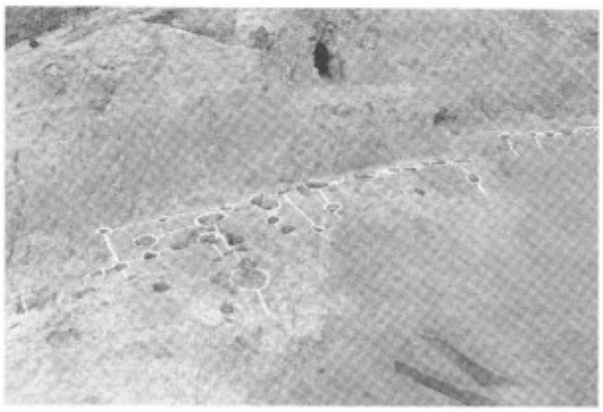


写真11　Ｉ区　ＳＢ－０４（南から）

建物跡と推定され、桁行は5.6mです。柱穴の直径約30～40cm、柱間距離は1.5～1.6m、梁間は西側で約1.5mです。床面には60cm×80cmの焼土面が確認できました。

ＳＢ－１３

西側斜面中腹の地山を削り出して作られた加工段（標高約30m）でも、ＳＢ－０４のように重複した３棟の建物跡（壁側よりＳＢ－１３ａ～ｃ）を検出しました。この加工段は南北方向に約40mにわたって延び、それに伴う壁の高さは最高部70cmの高さで、西側に緩斜面をなしています。ＳＢ－１３ａは、壁際に幅20cmの浅い溝が廻り、４間×１間以上の建物跡と推定され、桁行5.6mです。柱穴の直径40cm、柱間距離0.9～1.2m、梁間は北側で1.2mです。ＳＢ－１３ｂは桁・柱穴の位置がＳＢ－１３ａから80cm南よりにあり、規模・形はＳＢ－１３ａとほぼ同様だと思われます。桁部分の最も南側では、同じ柱穴に柱痕が２か所認められるため、同じ位置で建て替えが行われたと考えられます。桁行5.6m、柱穴の直径30～40cm、柱穴距離0.8～１m、梁間は北側で1.4mです。ＳＢ－１３ｃは南北に延びる３間以上の建物跡で、桁行約4.1m、柱穴の直径30cm、柱間距離１～1.2mです。

ＳＢ－１７

ＳＢ－０４から東へ10mの地点に東西６m・南北７m余りの平坦面をつくり出し造られており、柱の配置から、３間×３間の総柱建物跡で倉庫跡と考えられます。柱穴の直径40～60cm、柱間距離は南北1.6m、東西は1.4～1.8mとやや不均等です。その他床面に10数穴のピットを確認しましたが性格その他詳細は不明です。遺物は出土していません。

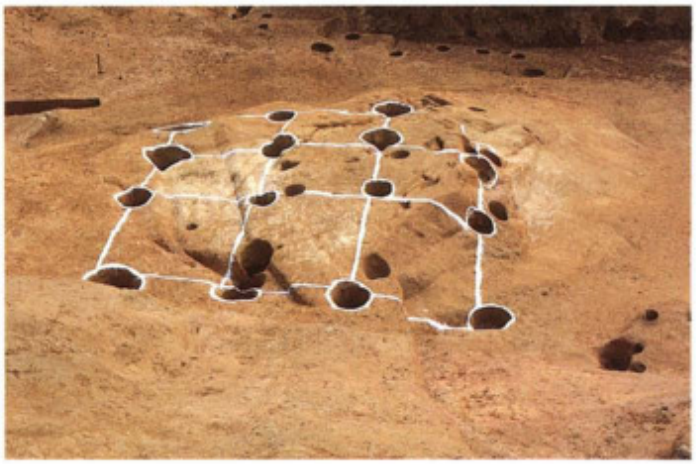


写真12　Ⅰ区　ＳＢ－１７（北から）

横　穴　墓

ＳＢ－０４の真北、北側斜面の中腹（標高約26m）に位置しています。前庭部は幅約４m、長さ約4.6mの大形の長方形をしています。羨道は幅１m・長さ

2m、玄門は幅80cm・長さ80cmです。玄室は幅2.8m・奥行2.0m、高さは中央で1.6mの平入りのテント形をしています。この横穴墓は盗掘のためすでに開口しており、玄室内から土器は一片も出土しませんでした。盗掘が玄門上部から行われているため、玄室前部の天井部は崩落が著しく、壁や天井の岩石・土砂が入口～奥壁にかけて50cm～1m程度に堆積していました。玄室の東側では東壁に沿うように0.8m×1.7m、深さ5～12cmのほぼ長方形の凹みが認められました。また、正面には凵字形の周囲より一段低い部分が認められました。羨道部からは裏面に凹みを付けた荒島石等の石材が若干検出され、長方形の凹みがあることからも組み合わせ石棺がしくまれていた可能性も考えられます。

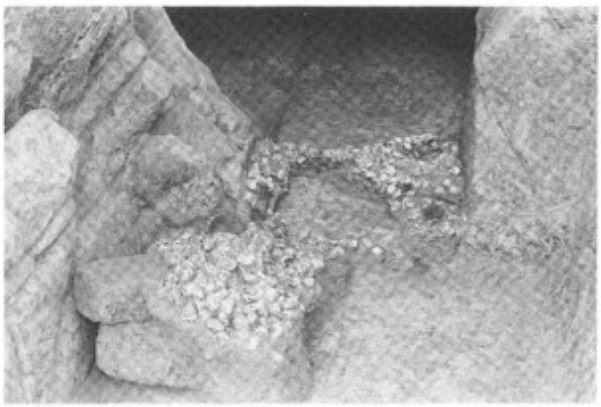


写真13　I区横穴墓玄門部遺物出土状況

遺物は、前庭部・羨道部から壺や蓋坏等の須恵器や鉄刀片が出土しています。玄門部には大量の赤貝の殻が堆積しており、この赤貝の殻の中から牛骨も2片出土しています。赤貝の殻は二枚合わさったままのものが多く、この中に認められた牛骨も軟骨が付着しているなど、食物の残滓が放置されたのではなく、埋葬時に供献されたものだと考えられます。この横穴墓の造られた時期は、盗掘を受けているため明確ではありませんが、出土した須恵器は7世紀後半頃と考えられます。

(2)　II　　区

地山を深さ2mばかり削り出してつくられた長さ約40mの加工段（標高約13.5m）と、その南側で一段低くつくられた長さ約15mの加工段において10棟の掘立柱建物跡を検出しました。

写真14　II区　SB－01（北から）

SB－01

2段目の加工段に並行して作られている3棟の建物跡です。(以下

東側よりＳＢ－０１ａ～ｃ）すでに南側の地山は流出しており、床面は現状で長さ13m×４mの大きさです。壁は流出著しく現状の高さは20cmです。壁際に幅20cm、深さ５～10cmの溝が廻っています。ＳＢ－０１ａは、３間×１間以上の建物跡と推定され、桁行約５m、柱穴の直径40～60cm、柱間距離は1.1～1.2m、梁間は南側で1.5mです。ＳＢ－０１ｂは、ＳＢ－０１ａとほぼ並行しており、同じく３間×１間以上の建物と推定されます。桁行5.2m、柱穴の直径20～40cm、柱間距離1.3～1.5m、梁間は南側で1.8mです。ＳＢ－０１ｃは、ＳＢ－０１ａ・ｂの中間に柱穴が並び、２間×１間以上の建物と推定されます。ＳＢ－０１ａの柱穴と重複しており、同じ位置で１度以上の建て替えが行われたと思われます。桁行3.4m、柱穴の直径30～40cm、梁間は南側で1.8m、柱間距離は1.2m・1.6mとやや不均等です。

写真15　Ⅰ区住居跡出土遺物

以上のように、古墳時代集落が営まれていた可能性を示す多くの建物跡がみつかりました。隣接する越峠遺跡や臼コクリ遺跡Ｄ区でも古墳時代同時期と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、周辺遺跡の発掘調査をふまえて今後この地域での集落形態や住居の変遷について考える際の貴重な資料となりそうです。竪穴住居跡はいずれも古墳時代中期頃のもので、ほぼ同時代頃だろうと考えられます。掘立柱建物跡は、地山を削り出した加工段につくられていますが、すでに谷側の大部分が流出し、しかも、遺物の出土が少ないため詳細は不明です。しかし、古墳時代後期と考えられる土器が出土していることから、古墳時代中期は竪穴住居を中心に、やがて後期になるにつれ掘立柱建物跡が住居の中心になっていったのではないかと思われます。また、倉庫跡と考えられる総柱建物跡の検出により、ある程度の規模のまとまりをもって集落を形成していたと考えられます。

横穴墓は、盗掘を受けていたため須恵器の完形品数点が出土したのみで詳細は不明ですが、玄門部に赤貝が大量に供献されていたと考えられ、横穴墓のありかたとしては特異な例です。西に隣接する臼コクリ遺跡では15基の横穴墓が確認されており、この遺跡との関連も今後検討を必要とします。

越　　峠　　遺　　跡

越峠遺跡は安来市黒井田町・佐久保町に存在し、伯太川下流域の東岸に位置する丘陵の南西側及び丘陵縁辺の谷部分に立地します。調査地点が２ヵ所に分かれているため、西側の調査区をＡ区、東側の調査区をＢ区と呼びます。

＜Ａ　　区＞

Ａ区は北東から南西に延びる丘陵上で、最も高い所で標高は約40mです。尾根上から竪穴住居跡３棟（ＳＩ－０１～０３）、東側斜面から掘立柱建物群を検出しました。丘陵西側斜面からは、尾根上から流れ落ちたと考えられる須恵器、土師器が出土しただけで、住居跡などの遺構は検出されませんでした。以下、尾根上と東側斜面の遺構、遺物について述べます。

ＳＩ－０１は、標高約35mを測り、丘陵頂部からわずかに北東に下った所に存在します。４本の柱をもつ隅丸方形住居で、一辺は約５mあります。４つの柱穴のうち３つには、柱をしっかり支えるための裏込めが施してありました。遺物は、床面から弥生土器の破片が、ピット内から土器片が出土しました。

ＳＩ－０２は、丘陵の尾根筋上に存在し、住居の標高は約32mです。直径約９mとかなり大形の円形住居と考えられますが、住居内にはピットが約50あり、不規則な並び方のため、どれが柱穴にあたるかを現在検討中です。遺物は、床面から土師器、ピット内から須恵器の破片が出土しています。

写真16　Ａ区　ＳＩ－０３

ＳＩ－０３は、標高約34mで、丘陵の尾根からわずかに東に下った斜面に存在します。平面の形が５角形をしていて、それぞれの頂点近くに柱穴をつくった５本柱の住居跡です。遺物は、弥生時代後期～古墳時代初めの甕形土器や、炭が床面から検出されました。

また、中央ピットや柱穴からも炭とともに土器の細かい破片が出土しました。

東側斜面からみつかった掘立柱建物跡は、斜面を削ってつくりだされた4段の平坦面のうち、一番上の段と一番下の段に存在します。一番上の段の標高は約21m、一番下の段は約16mです。中間の2つの段からは遺構、遺物とも検出できず、この建物跡が建てられた時代よりも後の時代に、削って作られた平坦面であるとも考えられます。今のところ、建物跡は一番上の段で5棟、一番下の段で3棟あると推定しており、どの建物にも、建物を巡る溝が掘り込まれています。また、いずれも東側（谷側）が、後の時代に削られて失われているため、東西方向に並ぶはずの柱穴列がほとんど見つからず、一番上の段で東西方向に1間検出したほかは、東西方向に並ぶものはありませんでした。遺物は、一番上の段から古墳時代後期～奈良時代の須恵器や土師器の甕が出土しています。一番下の段からはたくさんの須恵器の甕の破片と土師器が出土しました。

写真17　A区　SB－02

＜B　　区＞

北東から南西にのびる2本の低い丘陵に挟まれた谷奥の緩斜面に立地します。標高は9m～15mで、検出した遺構は、竪穴住居跡3棟（SI－01～03）掘立柱建物跡2棟（SB－01、02）など

写真18　A区　掘立柱建物跡群

です。

ＳＩ－０１は、調査区の最も北側に位置します。南側半分が後の時代に削られており、北側の２つの柱穴と中央のピットしか検出できませんでしたが、一辺３ｍぐらいの隅丸方形住居で、４本の柱をもつものと考えられます。また、残っていた北側の壁に切り込むようにピットが２つ掘りこまれていました。遺物は、弥生土器が出土しています。

ＳＩ－０２は、直径が約４ｍある４本柱の円形住居です。床面からは、弥生土器、焼土、炭が検出されました。住居の床面を巡る溝は西側の一部でみつかっただけでした。遺物は、住居の埋め土の中から弥生土器、土師器などが、床面から弥生時代中期～後期の甕形土器の口縁部が出土しています。

ＳＩ－０３は一辺３ｍ程度の隅丸方形住居です。これもおそらく４本柱の住居跡と考えられますが、柱穴のうち１つは検出できませんでした。溝はＳＩ－０２と同じように一部で確認されただけでした。遺物は、弥生土器が出土しています。

ＳＢ－０１は、２間×１間の柱穴の列が確認されていますが、ピットは深さ10cm～40cmと浅く、床面も見つかっていないことから、後の時代に削られたということも考えられます。この建物からは、土器などは何も出土していません。

ＳＢ－０２は、調査区の南東隅で検出されたため、一部分しか発掘できませんでしたが、掘立柱建物跡と考えられます。地山を削り出して幅20～50cm、深さ10cm程度の浅い溝を設け、更に掘り込んで床面をつくりだしています。ピットは、17穴が確認されましたが、どのように柱穴が並ぶのかは現在検討中です。遺物は、弥生時代中期～古墳時代初めにかけての壺形土器・甕形土器や高坏などが検出されました。

写真19　Ｂ区　ＳＢ－０２　土器出土状況

<ま と め>

今回の発掘調査の結果、越峠遺跡は、弥生時代中期～古墳時代初め、及び古墳時代後期～奈良時代にかけての住居を中心とする遺跡であることが分かりました。

竪穴住居跡については、A区とB区であわせて6棟を確認しました。その中でも、A区のＳＩ－０２については、直径9mの円形住居ですが、古墳時代中期以降の土器を出土していること、大きさ、平面の形、ピットの数など特殊なあり方をしており、注目されます。また、五角形の平面形をしたA区のＳＩ－０３などそのほかの住居跡も、ほとんどが床面から土器を出土しており、時代をはかるものさしとなる土器の編年を組み立てて行くうえで、貴重な資料となることは間違いないでしょう。

掘立柱建物跡は、A区でみつかったものはピットを平坦面全体に掘り込んでおり、狭い面積をいっぱいに使って何度も建物を建て替えた様子がうかがえます。また、建物のあり方などは、隣接する岩屋口遺跡で確認されたものとよく似ており、集落の構成と集落同士のつながりを考えるうえで、今後慎重に検討して行く必要があります。

写真20　B区　ＳＩ－０１

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査概報
(臼コクリ遺跡、岩屋口遺跡、越峠遺跡)

発　行　　1992年3月30日

編　集　　島根県教育委員会
〒690 松江市殿町1番地
Tel (0852) 22－5946

印　刷　　黒　潮　社